

## わたしの戦争体験

長崎県諫早市 山本 正彦

### ○ 滅私奉公

「上官の命令は即、陛下の命令である」問答無用の名言？のもと、一言の弁解もおろはすのなかった今を去る50年前、皇軍の一兵卒として駆け巡ったあの頃の思い出、隔世の感ひとしおである。

### ○ マンパ要員

「おまえらはマンパ要員たい」と古兵殿がおっしゃる。入営したばかりの我々初年兵には何のことやらさっぱり分からん。右を向いても左を見ても上官また上官、欠礼でもしようものならびんたが幾つ飛ぶやら分かったものじゃない。その日その日がまさしく恐怖の連続である。「今年の初年兵もまた寝て泣くのかね」。郷愁をそそる消灯ラップでふと我れにかえり、空腹とびんたの痛みが交錯し、藁フトンでねむりにつく。赦々たる伝統を誇る大村西部第47部隊に現役兵として入隊し、古兵殿や上等兵殿のとてつもない偉さが分かりはじめた2週間目に移動することになり、初めてマンパが満州（現在、中国東北地方）派遣軍と分かり、征途についたものである。

### ○ 内務班

ソ連との国境線沿いにあった我が部隊（第108部隊）は関東軍きっての精鋭部隊と誇っていた。1期の検閲に向って訓練は日毎に厳しさを増し、これに併行してしごきも強まってくる。夕食時から就寝時まではまるで生地獄である。内務班の奥まった所に、3年兵、4年兵の上等兵殿や兵長殿が凝視されておられる。初年兵にとってはまさに虎に狙われた猫である。ある日、点呼終了間もない時であった。班付上等兵殿から「貴様の編上靴を持って来い」とのこと。

『何かあるな』と思いつつ靴置場に行ってみると、先刻まで確に揃えていたはずの片方がない。探せども探せども発見できない。仕方なくてその旨を告げると上等兵殿曰く、「軍靴はなくした方がよいか。それともなくさん方がよいか」と一喝された。むろん「なくさん方がよいのであります」と即答するがすんなりとは聞き入れてくれない。これからが大変である。上等兵殿はにやりともしないで近くにいる古兵殿にそのことを尋ねるが、古兵殿も「俺はよく分らんばい」との返事。「じゃ〇班の〇〇上等兵の所に行きよく尋ねて来い」とのこと。仕方なくめざす〇班に行き、まず「〇班の〇〇2等兵、入ってよくありますか」と力一杯告げる。その瞬間片手に片方の靴を持つあわれな姿、班員の視線は当然ながら集中する。待ってましたとばかりの古兵達は「気合いがない、やり直し」と来る。2度、3度と繰り返してようやく上等兵殿の前に進み出て、かたのごとく「軍靴はなくした方がよいか、それともなくさん方がよいでありますか、お尋ねに参りました」と申し上げる。ところがこの上等兵殿もオツムが悪いとみえ、「さあ、その辺のことは俺にはよく分らんばい。お前はどうか」と側にいる古兵殿に耳打ちす

るが、これまた一向にちがいがあかない。はては1時間近くもたらい回しになった揚句、ようやく仏の兵長殿が現れ、「なくさん方がよい」との教えを受け、やっとの思いで班に帰ってみると、片方の靴はちゃんと戻っているではないか。なさないことこの上もない。夕食後の内務班はまさに古兵達の憩いの場であった。

#### ○ 死闘

昭和19年12月初め、いよいよ我が部隊にも南進移動の下命が降り、満州東部国境から旅順へと移駐した。零下20度前後の極寒下、海岸砂丘に天幕兵舎が急造され、その日以来来る日も来る日も戦闘訓練が続き、各隊の競争意識はいやが上にも高まっていた。11中隊第1小隊第3分隊長であった私も他の分隊に負けじと大いに張切っていたものである。当時各分隊には数え年37、8歳の召集兵（朝鮮、台湾等から徴兵された兵）が1、2名あて配属されていた。上陸演習をはじめとする各種の訓練は毎日に激烈を極め、飢えと寒さはつのるばかり、明けて20年正月から中旬ともなれば、いわゆる過労と栄養失調で中でも召集兵は病人続出となる。「気合いがない、馬鹿んまねするな」とふたこと目には手拳の嵐、4、5発張っても何の反応もない。こうなると危険が迫っている。仕方なく練兵休の烙印のもと幕舎当番に残すが、ものの3日も経てば名誉の戦病死であった。「あわれというもまたおろかなり」の一語である。

#### ○ 虱との戦い

飢えと寒さの2ヶ月近くが過ぎた20年1月下旬、我が部隊を含めた1個師団の大部隊はいよいよ南方戦線へと移動することになり、中継基地釜山に到着した。その間文字通り着のみ着のままで、入浴など皆無であった。当然ながら虱との戦いがはじまる。夜昼なしに寸時をおしんでつぶしにかかるが、繁殖力の高い虱には及ぶすべもなし。着込んでいる毛糸シャツの縫目はおろか、襟を裏返せば何十何百の虱が喰いついている。これまた死闘に外ならない。今にして思えば、よくぞ発疹チブスに罹らなかったものといえる。戦後耳にしたDDTとやらであればあんなことはなかったものと、今更ながら当時の医薬の遅れが痛感されてならない。この件で今もって心に残るのは、釜山より一旦博多に移り、乗船待ちのため数日間を各旅館に分散投宿した時のことである。その間、国防（愛国）婦人会の方々が面倒をみて下さった。久方振りに懐かしの畳と入浴をしみじみ味わったが、一方でいかに釜山基地で衣替えしたとはいえ、携帯の毛布等は以前のまま、我々が立去った後の虱の始末を思うとき、想像するにつけ気の毒でならなかった。私はその思いから分隊員一人一人から支給されていた石けんを1個ずつ徴集して、婦人会の方々へ返礼しお詫びの印とした。当時は貴重品ゆえもあってか、大変感謝されたことを忘れていない。

#### ○ 敵愾心

鍛えに鍛えた我が精鋭部隊、総勢3000有余名は各大隊編成のもと、いよいよ船上の人となる。ときまさに戦運我れに利あらず敗色濃い情勢下であり、船団で無事目的地に到達するは困難視されていた。私達もそのことは十分察知していたせい、博多港の岸壁で乗船するに際して、これが内地のみおさめと、誰いうとなしに各自が波止場のコンクリートを軍靴で強く足

踏み、カツ、カツ、カツと響かせながらタラップへと足を進めたものである。あの時の心境は悲愴そのものであった。輸送船団は損害を少なくするために各大隊毎に数日おきの出航であったという。私の所属する中隊は当初輸送船馬來丸（約4500t）に乗船したが、いよいよ出航を前にして、積載超過のため下船命令を受け、そのため本隊と別行動となり憤懣やる方ない思いで下船。

その後下関に移り、同地で別途船団を組み出発したが、途中暴風雨や魚雷の襲撃やらで、まさしく九死に一生の思いで2週間後に台湾キールン港に入港することができた。

がしかし、上陸して初めて知らされたことは、前記の馬來丸は数日前の20年1月25日昼過ぎ鹿児島県坊津町沖合で、また他の1大隊（くらいど丸5000t）は同月29日キールン港外で、共に敵の魚雷攻撃により沈没、計2700有余柱の戦没者を出していたのである。生死を共にした戦友幾百幾千が弾丸一発も射たぬまますでにこの世にいないとは、まさに痛恨の極みでしばし茫然となり、敵愾心は天をつく思いであった。3分の2の兵員を一挙になくし、必然部隊編成がとれず、そのため我が大隊は独立大隊として台湾南部の守りについたのである。

それにしてもあの時馬來丸より下船命令を受けていなければ、おそらく生きて復員はなかったものと今更ながら運命のいたずらとしか思えない。『人間万事塞翁が丙午』とは、まさにこの事ではあるまいか。